
ヒカルの碁～本因坊への道～

tukasin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒカルの碁／本因坊への道／

【Nコード】

N2954P

【作者名】

tukasin

【あらすじ】

若獅子戦が終わってからのお話です。

若獅子が終わって一か月が経過した。さらに強くなったヒカルは、塔矢と同じく低段者には敵なし状態だった。そんなある日、北斗杯が好評だったので今年から新たに加わった棋戦N杯が始まると知り、物語が再び動き出す。

プロローグ（前書き）

初めて二次創作ものを書くことにしました。

ヒカルの碁を見て、続き読みたい！ と半ば衝動的に投稿しちゃいました、更新は鈍亀でストックはなく設定の矛盾は多々あると思いますが、頑張つて書こうと思いますので、宜しくお願いします。

ブローグ

季節は6月、パシン…と軽快な音を立て碁石を打つ。

「…ありません」

相手が負けを認め。

「ありがとうございます」

両者がお辞儀をし、勝った人物、進藤ヒカルは内心勝利の余韻に浸っていた。

これで棋聖戦二次予選一回戦突破した、若獅子は塔矢に負けただけ、今に見てろ、俺の方が絶対先にタイトルを取ってやる。

しかし現実には塔矢の方が一枚上をいつており、本因坊戦のリーグ入りを皮切りに、名人戦、十段戦は三次予選までいつていたが負けしてしまった。そうやすやすと勝てるほど高段者は弱くは無い。だが二人の若い棋士は、着実にその階段を上っていた。

現在の成績

進藤ヒカル

棋聖戦二次予選、名人戦二次予選敗退、本因坊戦一次予選、十段戦二次予選進出、天元戦二次予選敗退、王座戦二次予選、碁聖戦出場×

塔矢アキラ

棋聖戦二次予選、名人戦三次予選敗退、本因坊戦一次予選、十段戦二次予選、天元戦二次予選、王座戦二次予選、碁聖戦出場×

碁聖戦は五段以上のため二人とも出場できなかった。

北斗杯が終わってからヒカルの調子は良く塔矢には負けたが他は全勝で軽い足取りで棋院を後にする。

あーっと、今日は和谷ん家でリーグ戦か、まだ時間あるし…っと
そうだあかりの学校に行くか、まだ部活やってるかな。

時刻を確認しヒカルは月に一度か二度のペースで囲碁を教えているあかりの学校に向かった。

「又負けたあ、やっぱり筒井さんは強いですよ」

「ありがとうあかりちゃん。でも進藤君の方が百倍強いよ」

「いいですよヒカルなんて、全然ここに来ないし、囲碁部でもファンの子が多いからってデレデレしちゃって」

考えるだけであかりは腹が立つてくる。この気持ちは何なのか分かってはいるが、認めるのも癪でこころの奥に押しのける。

そんなあかりに筒井は苦笑いを浮かべ、立ち上がり部長の責務を全うするため、教室の半分ほどある部室の中央で手を叩き注目をこちらに向ける。

囲碁部は筒井、あかりを合わせて九人で女子が四人、男子が五人、大会の成績等を見ても平均的なごくごく普通の部。筒井が主将になったのもそういう経緯だった。

皆が注目してくれたのを確認すると、筒井が口を開く。

「先ほど先生から連絡があり今日はこの後進藤君が来ますので、皆さんくれぐれも騒がないでくださいね」

無駄な事だと分かつてはいるが、一応部長の立場として釘をさす。

筒井さんが対局中に先生に呼ばれたのってこの事だったんだ。ヒカルったら私にも連絡くれればいいのに。あかりは嬉しそうな表情になるが。

「進藤さん来てくれるんですか！わっ嬉しい」

ツインテールの小柄で小顔の少したれ目の可愛い感じの女の子が体全体を使って喜びを表現していた。

それをじと目で見るあかり。もぉ〜ヒカルったら来たら怒ってるんだから。

態度を一転させ頬を膨らませヒカルに八つ当たりするであろうあかりを見て。

進藤君も大変だなあ。等と筒井は引きつるように微笑し、間を図った様に、扉が開いた。

第二話『学校』

「ちーす」

ヒカルが手を挙げ囲碁部の面々に挨拶をする。先ほど考えていた事も吹き飛んで、笑顔であかりはヒカルの元へ行こうとしたが。

「ヒカルさんこんにちは」

ぴよんぴよんと音が鳴りそうな位飛び跳ねながらツインテールの女の子がヒカルの元に向かう。先を越されたあかりはフンと鼻を慣らしそっぽを向く。

「おっ、あかりそんなしょくれた顔してどうしたんだ」

「何でもないわよ。その久しぶりヒカル」

あかりはヒカルに心配され内心嬉しかったのは内緒だ。

「やぁ進藤君こんにちは」

「筒井先輩こんにちは」

筒井に挨拶をしたヒカルは皆に挨拶をした後、さっそく、碁盤を四つ並べ。

「まずは女の子から始めるぞ。置き石は何個置いてもいいからな」

挑発的な口調にあかりはむっとして、置き石をたくさん置く。

「あかりそんなけでいいのかよ。そんだけじゃあすぐ勝っちゃうかな」

得意げな笑みを向けるヒカルにむつとし。絶対に勝ってやるんだから。と意気込んでみたまもの、二十手終わる頃には冷汗をかき、三十手終わる頃にはほとんど差は無くなり、四十手終わる頃には、既に体制は決していた。

「又負けた。ちょっとヒカル！ 手加減位しなさいよね」

あかりは文句を言うが、ヒカルとしてはだから置石もつと増やした方が良いつて言ったのに・・・と心の中で愚痴をこぼす。

言ったら言っただけ又喧嘩になるんだよな。ヒカルは溜め息を溢し、目の前の碁に集中した。

「やったあ勝ちました」

ツインテールの女の子が嬉しさを爆発し、ウサギの様に飛び回っている。

そりゃー勝つわな、あんなに置石置けば。「おめでとう夏美ちゃん」とひきつった笑いで祝福する。碁盤を見ると五十個ほど黒石が多く、その時点で敗けが決まっていたようなものである。

他の二局は、ヒカルの勝利に終わり、敗着や検討等が終わった後、男子に移る。今度は四面打ちじゃなく五面打ちだが、今のヒカルっ

て見れば楽にこなせる。

筒井は主将からかヒカルが後輩だからか分らないが、来たときはいつも互先で打っている。

「よし、筒井先輩に五十目勝ちするぞ」

腕捲りし意気込むヒカルを見て。

「ははは…進藤君お手柔らかに頼むよ」

と苦笑いを浮かべる筒井だった。

男子の方はヒカルの全勝に終わり、女子と同じ事をした後、夏美が手を挙げアピールし、ヒカルが当てる。

「この間週間暮見たんですけど、進藤さんN」杯本選から出るって本当ですか！」

野次馬根性丸出しの夏美ののりに、乾いた笑いを浮かべた。

ニユージエネレーション

N」杯とは、今年新たに加わった棋戦で、二十五歳以下に出場条件があり、シード選手十六名と予選を勝ち抜いた十六名で行われるトーナメント戦の事である。

「ああ、北斗杯のメンバーは予選免除だぜ。他にも、倉田さんに、冴木さんに、芦原さんと後は知らない名前ばかりだったな」

というか、あった棋士しか分からないヒカルだった。北斗杯のメ
ンバー以外は段位の高い順と成績が優秀なものから順にシードにな
る。

この後夏美の質問攻めにあったヒカルだったが、時間を理由にそ
そくさと帰った。なぜかあかりが不機嫌なのを不思議に思いながら、
時間があつたらあかりの家に行こうと思い、和谷の家に向かった。

第三話『和谷の家』

和谷の家はアパートの一室で、インターホンを押す事無く、扉を開け進藤は勝手に入って行く。玄関の靴は多く、ヒカルの靴の置場も無かったが、強引に場所を開け、靴を脱ぎ中に入った。

「よつ、皆」

そこにいたのは、和谷、越智、伊角、本田、冴木、中山、越智、門脇、奈瀬、福井の十人。

それぞれが挨拶を返し、進藤も空いてる場所に座る。

碁盤に向かっているのは、伊角と和谷でもう大寄せの終盤に入っており、終局が近かった。

進藤は中腰の体制で碁盤を見る。

勝っているのは伊角さんだな。でもあそこに打てばまだ分からないぜ。でも和谷気付くかな。状況を見守っていたが、和谷は気付かず、あえなく投了する。

「やっぱ伊角さん強いぜ、進藤より強いんじゃないか」

「ふん、進藤なんかより僕の方がシード選手にふさわしいのに」

和谷や、越智が口々に勝手な事を言うが。

「和谷、俺ならこの局面打開できるぜ」

「言っじゃないか進藤、ならやってみろよ」

和谷とヒカルが場所を入れ替わる。

「私から見てもいくら進藤でも難しいんじゃないかな」

「んゝ進藤君なら勝つと思うよ」

奈瀬と福井がひそひそと話す。

和谷家内の下馬評で言えば半々だ。

「進藤、いつも負けてばかりだが、ここからでは負けない」

闘志漲る伊角に、おもしれえと思う進藤だった。

「……負けました」

伊角が投了し、ヒカルの勝利に終わるが、和谷は悔しい気持ちで一杯だった。俺が投げ出した碁を見事立て直し勝利を収めた進藤……時々進藤の読みの深さについていけない時があり、北斗杯が終わった時から、それが顕著になって表れてきた。悔しい……勝負を投げだした自分。それから検討に入り、本日の本題に入る。

「今日皆に声をかけたのは、N-J杯の事です。ここにいる進藤と冴木さんは本選出場し、中山さんと門脇さんは資格は無いですけど、

今日は来週から始まる予選の壮行会として呼びました。奈瀬とフクはもうすぐ始まるプロ試験の激励な。皆で一手十秒の早暮トーナメント戦をしたいと思います。負けた者同士は負けた者同士で逆トーナメント戦をしたいと思います」

和谷そう言い、口ぐちに賛同を得る。

「よし、絶対優勝だ」

ヒカルは意気込みを見せ。

「進藤、僕は貴様には負けない」

「進藤、さっきは負けたけど、次は負けない」

「絶対阻止してやりや」

越智、伊角、和谷が対抗する様に言い、全員がヒカルにライバル意識を燃やしていた。

だが、明け方まで行われたトーナメントは結局優勝はヒカルになり、本選出場と、プロ試験合格を誓い合いお開きとなった。

第四話『ヒカルとアキラの研究会づくり』

（一週間後）

十段戦二次予選二回戦

良いける。

子ヨセの段階に入り、ヒカルには既に道筋が見えていた。

「一目半負けか…」

相手はがつくりと頂垂れ、ヒカルは真面目な表情だったが、内心ではガッツポーズをし綻ばせていた。

立ち上がりかえろうとした時、先に終わっていた塔矢から声を掛けられ

「ん？ どうした塔矢」

北斗杯以来アキラとは頻繁に碁を打ちあう仲になり、今もこうして気軽に話せるようになった。

「ちょっと話したい事があるんだが、いいか進藤」

「おおいいぜ、いつもの碁会所でも行くか」

そして二人は市原さんが経営している碁会所に向かった。

道すがら今日や最近の碁の内容などを話している内にあつという間に碁会所についた。

「なあ塔矢、今日は負けねーぜ」

「進藤、お前には負けない」

火花をバチバチと散らせ、中に入る。

「あらら、来た時から一色即発」

「みんな、退散だ退散」

ピリピリムードを察して、席を開け、塔矢とヒカルから距離を取った。

「だあゝくそ又負けた」

中盤辺りまで互角の展開を繰り広げていたが、強引過ぎると言っ
ていい塔矢の碁に押され、それでもヒカルは北斗杯で培った気迫で、
終盤、最後の最後まで分らない展開まで持ち込んだが、結局塔矢
の半目勝ちに終わった。

検討が終わった後（と言ってもほとんど喧嘩だが）、ようやく本
題に入る。

「なあ進藤、僕らで研究会を作らないか？」

研究会と言っても様々あり、ベテランの棋士の元、教えを請う方法と、和谷の研究会の様に、若手が集まって切磋琢磨する方法などがある。アキラが提案したのは後者であるが。

塔矢ってそんなに友達いたかな？ とヒカルが疑問に思う。

「それはいいけどよ、塔矢人数は居るのかよ。俺達二人じゃ話にならないぜ」

二人だけだと研究会と言うより、パートナーが対戦相手で、いつもやって来た事と同じである。

「一人心当たりがあるんだ。父さんの知り合いで何度かあった事があるんだが、小学生の女の子で、既にプロ同等ぐらいの気力で、今年プロ試験を受けると聞いている。彼女には僕が話しておくとしてよ。進藤、もう一人知り合いで女の子は居ないか？ 彼女一人だと心細いと思うんだ」

ヒカルはうんと唸り。あかり…は、面倒見いいけど棋力的に無理だろうし、他に女の子……あっそう言えば。

「院生に一人、俺らより少し年上の知り合いの女がいるぜ。棋力的には少し劣るけど」

「院生なら文句は無いよ。誘っておいてほしい。…それから、北斗杯の韓国メンバーも声を掛けてくれないか。ネット碁で対戦しお互い検討し合いたいと思うんだ。どうかな進藤」

「プライベートで打った時、秀英と電話番号交換下から聞いてみるぜ。あいつにも借りを返してないしな…」

ヒカルは北斗杯で惜敗した相手を思い出し唇を噛みしめた。

「それなら……」

ヒカルとアキラは意見を出し合い、次の事が決まった。

塔矢とアキラの研究会メンバー。

確

●進藤 ヒカル

●塔矢 アキラ

予

●塔矢の知り合いの女の子

●奈瀬 明日香

●北斗杯韓国メンバー

●社 青春

●倉田 厚

- ヒカルが後二人位を誘う

第五話『勧誘結果・上』

く高コ 永夏ヨシハ邸

ヒカルから電話をもらった秀英は、面白そうだし、借りを返すためOKしたが、永夏の家にならうと行く予定があったので、もう一人の北斗杯メンバーイルファンも誘って、そこで話し合いを行う事にした。

「フン、あの野郎の誘いなんてうけるはずないだろう。地球が百階回っても無理な話だ」

「俺は良いぜ。暮の勉強になるし、進藤とも対戦してみたいしな」

イルファンは了解をもらったが、やはりというかなんとというか北斗杯でヒカルとは犬猿の仲になってしまい、アキラと研究会のメンバーを煮詰めていた時、永夏だけ抜かそうと、ヒカルは最後まで行っていたが『負けて怖気づいたのか進藤』と言われ、最後はやけになり渋々認めた経緯がある。

仕方ない、進藤だけの名前で誘いたかつたんだけど、奥の手を使うか。これを言えば永夏はオッケーするだろうと秀英は思っていた。

「塔矢アキラも参加するらしいよ」

その言葉だけで永夏の顔色ががらりと変わり、秀英は自分の目論見が成功したと分かった。

塔矢先生から自分と同等と言われたアキラの事をライバル視しており、北斗杯で対戦することを楽しみにしていたが、ヒカルの邪魔が入り、それは敵わず、いつか対戦してみたいと思っていた。

進藤は邪魔だが塔矢アキラとこんなに早く対戦が敵うとわな…進藤はいらないが我慢するか。永夏はそう思い。

「それを早くいえ。俺も受けよう。進藤を完膚なきまでに叩きつぶすのも悪くはない」

こうして北斗杯三人の研究会加入が決まった。

く木下家く

北斗杯の韓国メンバーと社 青春の了承が得られたとヒカルから聞いた塔矢は今、アポを取り現役を退いた元王座・天元・名人・棋聖の木下 雄大の家にいた。目的は孫である若干十一歳の天才棋士木下優香を研究会に誘うためだった。

客間に通され正座で来るのを待ち程なくして、スツと襖が開き、優香が着物を着て正座姿で現れた。

「遅くなってすみませんお久しぶりでございますアキラさん」

アキラより二回りほど小さく、まだあどけなさが残るが、凛々しい顔立ちをしており桜の様にほんのり赤い顔が急いできたのだと連想させる。

「そんなに急いで来なくて大丈夫ですよ優香ちゃん」

最近の近況やプロ試験を受ける優香への激励等他愛もない世間話をした後、本題に入る。

「話と言うのは僕が作る研究会に入って欲しいんだ。今確定しているメンバーは進藤 ヒカル、社 清春。北斗杯と一緒に戦ったメンバーと韓国 of 北斗杯メンバー。毎週土曜日に家に集まり、リーグ表を作り、一人はネットで韓国や関東棋院の社と対戦してもらい、空いてる者は自由に対戦してもらって構いません。優香ちゃんにとっても悪い話ではないと思うんだけど、どうか」

「本当ですか」

優香は、アキラの言葉を遮り、興奮した表情で体を塔矢の方にずっと向ける。優香が色めき立つのも無理は無い。韓国のトップ棋士である永夏に日本の若手トップ選手達と打つのは、願ってもなかなか打てる機会はなく、それを提案されたのだから、普段はお淑やかな優香もあんな反応をしてしまい、我に返り顔を真っ赤にし。

「謹んでお受けいたします」

塔矢とアキラの研究会メンバー。

確

● 進藤 ヒカル

● 塔矢 アキラ

● 木下 優香

● 北斗杯韓国メンバー

● 社 清春

予

● 奈瀬 明日香

● 倉田 厚

● ヒカルが後二人位を誘う

第六話『勧誘結果・中』

土曜日に行われたMJ杯一回戦は和谷、越智、伊角は一回戦を勝ち上がったが、本田は一回戦敗退となった。その場にいたヒカルも見ていたが、序盤本田が押していたが、気が緩んだのか、失着をしてしまい、そこを付け込まれ中押し負けに終わった。

その日アキラから電話で優香の説得に成功したと聞き、日曜日本棋院で院生の手合いがあるので、奈瀬を勧誘するためそこに向かった。

今ヒカルは院生ではないので、売店でジュースを買いいくつろぎながら奈瀬が来るのを待っていた。

「進藤じゃない、こんな所でどうしたの」

待つ事三十分ようやく奈瀬が出てきた。

「よお奈瀬、お前を待ってたんだ」

ヒカルは奈瀬を手招きして、来るよう足す。

「もぉ、何なのよ、勿体ぶっちゃって」

対局に負けたのか少し不機嫌な様子で。ヒカルの前に来る。

「あのさ、毎週土曜日に研究会を開く事になったんだけど、奈瀬も来ないか？」

奈瀬はうーんと考え。

「どうせ和谷の研究会と同じメンバーなんでしょ。和谷と対抗するのもいいけど、皆暇じゃないし誰も来ないと思うよ」

説明を省いたヒカルの言葉に奈瀬はてっきり和矢が研究会を作って羨ましいから自分も研究会を作るもんだと思っていた。

「いや、全然違うぜ。まず塔矢に、社に北斗杯韓国メンバーに木下優香っていう塔矢の知り合いの子だな今のところ決まっているのは」

そこまで話し、奈瀬の顔を見ると、金魚の様に口をパクパクとしていた。

「ちょ…それって、囲碁界の若手トップクラスじゃない！ 木下優香って言ったら、あの木下雄大の孫娘で…って進藤だし分からないよね」

進藤の囲碁界の知識の無さを思い出し、溜息を突く。

「悪かったな無知で…で、どうすんだよ」

少しむっとした表情でヒカルは奈瀬に聞き、あはは…と笑ってごまかした後。はっきり言って自分なんかじゃ中押し負けするのは目に見えているけど、これってすごいチャンスだよ。でも何で進藤私を誘ったのかしら、和矢や伊角さんでもいいはずなのに…もしかして。

「誘ってくれてありがとう。もちろん受けるわよ。こんなチャンス

に度とないかもしれないしね」

奈瀬はウィンクし愛らしい笑顔に変わる。もう進藤ったらうぶなんだから…でも私年下と付き合うのって趣味じゃないんだよね。想像を膨らませている奈瀬を尻目にヒカルは思う女って現金だな…と。

「まあこれで、アキラに言われた女の子も揃ったし、後は誰にするかな」

その後隣にいる奈瀬に二十分ほど説教されたのは言うまでも無かった。女心って難しい。

塔矢とアキラの研究会メンバー。

確

● 進藤 ヒカル

● 塔矢 アキラ

● 木下 優香

● 北斗杯韓国メンバー

● 社 青春

● 奈瀬 明日香

予

● 倉田 厚

● ヒカルが後二人位を誘う

第七話『勧誘結果・下の1』（前書き）

遅くなつてすいません。
それではどうぞ

第七話『勧誘結果・下の1』

説教も終わり軽く雑談した後、席を立とうとしたが後ろから子供二人に声を掛けられた。

「あの、すみません」

「すみません」

「あれ、庄司に岡どうしたの」

そう、若獅子戦でヒカルとアキラに破れた研究生の庄司と岡だった。庄司と岡はヒカルと奈瀬の話を最初から聞いており、自分達も入りたいと思い、こうして話が終わるのを待っていたのだった。

「あの、僕達もその研究会に入れてください」

「入れてくっさい」

「こら庄司もうちょっと頼み方つてものがあるだろう」

「わかってないなあ。その場のいきおいつてもんがあるだろう」

「勢いだけで何でもかんでも解決するわけ無いだろう」

「馬鹿だなあ。岡は、その場のノリつてものがあるだろう」

「馬鹿はお前だ。俺より順位下のくせに」

「へっへっへん俺よりそんなに変わらないじゃん」

岡と庄司はヒカルと奈瀬がいる事も忘れ、喧嘩を始め、又始まったかと奈瀬はため息をつき、ヒカルはついていけず啞然とした。院生内で知らない者がいないほど恒例で、起こるたびに、先生や奈瀬や足立などの先輩達に怒られるが、それでもやっているため、最近では先生以外注意する者がいなくなった。しばらく経ち喧嘩も収まった頃。

「いいぜ、丁度後二人どうするか悩んでいた所なんだ」

ここ一週間ヒカルは後二人をどうするか悩んでいた。和矢の研究会のメンバーも誘おうとも、二人というのがネックになり、伊角、和谷、越智、本田等々争奪戦になる可能性もあり、最悪内部分裂を引き起こす可能性もあるため、ヒカルは別の人を探そうと考え、かといってそのほかのメンバーで知っているプロと言えば卑劣なああの野郎と塔矢門下の人達しかおらず、それならアキラが誘う筈だから…非常に困っていた所に、今日の誘いは、まさに渡りに船だった。

「えへほんとにいいんか（ですか）」

「ほんとにいいの進藤。この子達、見ての通り騒がしいし、塔矢先生の家に行つて迷惑じゃない。それに私を含めてだけど棋力的に大丈夫なのかな？」

「それだつたら心配ないぜ、終わった後検討して何処が悪かったか研究するし、俺達と当たった場合やネット対戦の場合でも、置き石を置いてもらい、力が付いたら徐々に減らす様にするから…っと、それは研究会始つてからでいいか。塔矢の家に行つたらさすがに」

「へっへっくん。ほらみろ、俺が言った通りだろ」

「違う、僕の誠実な願いを聞き届けてくれたんだ」

又喧嘩を始めた二人を見て、奈瀬と進藤は顔を見合わせ溜息を零した。

確

● 進藤 ヒカル

● 塔矢 アキラ

● 木下 優香

● 北斗杯韓国メンバー

● 社 清春

● 奈瀬 明日香

● 庄司

● 岡

予

● 倉田 厚

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2954p/>

ヒカルの碁～本因坊への道～

2011年1月30日20時35分発行